

本書は、水俣病記念講演会をはじめ水俣フォーラムの催しにおいてなされた六〇〇を超える講演の中から選択した一一講演をもとに、巻頭の詞章と解説を付して構成したものである。

まぼろしのえにし

石牟礼道子

生死しよじのあわいにあればなつかしく候まうらう

みなみなまぼろしのえにしなり

おん身の勤行ごんぎやうに殉ずるにあらざ

ひとえにわたくしのかなしみに殉ずるにあれば

道行みちぎのえにしはまぼろしふかくして一期の闇のなかなりし

ひとつもわれもいのちの臨終いしまわ　かくばかりかなしきゆえに

けむり立つ雪炎せつえんの海をゆくごとくなれど

われよりふかく死めなんとする鳥の眸めに遭あえり

はたまたその海の割わるときあらわれて

地の低ひきところを這はう虫むしに逢あえるなり

この虫の死にざまに添わんとするときようやくにして

われもまたにんげんのいちいんなりしや

かかるいのちのごとくなればこの世とはわが世のみにて

われもおん身も ひとりのきわみの世を

あいはてるべく なつかしきかな

いまひとたびにんげんに生まるるべしや

生類しやうるいのみやこはいずくなりや

わが祖おやは草の親 四季の風を司り

魚うおの祭まつを祀りたまえども 生類しやうるいの邑むらはすでになし

かりそめならず今生こんじやうの刻ときをゆくに

わが眸まみふかき雪なりしかな

あわい あいだ、ま

おん身 あなた

勤行 修行、つとめ

殉ずる 命を投げ出す

道行 連れ立って行くこと

一期 一生、生まれてから死ぬまで

祖 親、父母、祖先

邑 村、里



水俣から——寄り添って語る ● 目次

石牟礼道子 まぼろしのえにし

石牟礼道子 まなざしだけでも患者さんに 1

浜元二徳 私たち一家を襲った恐ろしい公害病 7

吉永理巳子 亡き人びとの声を伝えたい 25

原田正純 水俣病は人類の宝 37

宇井純 世界の公害、日本の水俣病 55

土本典昭 私の水俣映画遍歴三七年 73

丸山定巳 水俣病と地域社会 95

富樫貞夫 水俣病事件は解明されたのか 111

松岡洋之助 「水俣病を告発する会」の日々 127

色川大吉 水俣の分断と重層する共同体 143

石牟礼道子 形見の声 169

実川悠太 解説にかえて 193

初出一覧 203

装丁 市川敏明・市川美野里  
カバー・扉図版(木彫) 中澤安奈





石牟礼道子

まなざしだけでも患者さんに

みなさま、ようこそおいで下さいました。ありがとうございます。

もう、五七年でしょうか(公式確認から)。

お一人、患者さんがおられるお家の中に行ってみますと、お一人ではなくて、認定申請をなさったり申請が通ったりなさるお家には、必ず、ご兄弟の方、おじいちゃんやおばあちゃん、三代くらい患者さんがいらっしやると思っただけ間違いない。

それは、みなさん地域社会に大変遠慮をなさいまして、一軒の家から一人名乗り出るのも心苦しいのに、まだあとにも兄弟がおります、子どもがおります、おじいちゃんやおばあちゃんも、病み伏しております。そうおっしゃるのがとてもお辛いので、一人にしておこうとお思ひになつて。

お一人ではないんです、一軒のお家からお一人だけ名乗り出られても。それを行政は全然察することができない。察しても聞かないふりをしておりまして、五七年というのも違うんです。みんなが知らない、数のうちに数える前に、人間ではないような声を出して苦しまれて。

わたくしの家は、まあ家族もわたくしがこのような所でお話するのを今日(二〇一三年四月二一日)初めて見たと思うんですけれど、わたくしの家は水俣川の川口にございまして、川口というのは海の潮も来るところで、その一番下流にある水俣大橋の袂たもとに避病院がございしました。避病院というのはご存じのように、伝染病にかかった方たちが収容される病院でございまして、そこに最初のうちはあまりにひどい方々が収容されたんです。それで昼となく夜となく、呻うめき声を出される。そのお声が人間ではないようなお声で。家族の方が、わが産んだ子とも思えんような呻うめき声。ベッドに寝かせておくと、手足を縛りつけておいても、あまりの苦しさに天に向かつて、こう、ギリギリ、ギリギリ舞いなさる。それでベッドの上縛縛つてある紐やら帯やらがちぎれて下に落ちなさる。

ちょうどそのころ、息子が結核になつて水俣市立病院の結核病棟に入りましたので看病に行きますと、隣に新しい病棟ができて、奇病病棟と言つておりましたけれど、そこからも呻うめき声が聞こえてまいりました。今でも思い出しますけれども、何かつかまろうとして、こう、爪の跡が、真新しい奇病病棟の壁に真新しい爪の跡が付いているんです。

夏は戸を開けてありますから、その前を通りかかると、目が合いそうになりますのでお辞儀をいたしますと、お辞儀を返して下さる方もいらつしゃいますが、胸の上に載せておかれ

た漫画本のような、週刊誌のようなものを、人が通るとぱっと立てなざる。つまり他人にお顔を見られたくない、そういうことをなざる方もいらっしやいました。そうして亡くなられて、火葬場に連れていかれるんですが。

わたくしの部落には避病院の先に火葬場がございました。わたくしの小さいときは水俣町のほうに住んでおりましたけれども、お葬式を見かけますとあまりよく存じない方でも、道を通る方たちは立ち止まって合掌しておりました。でも、その避病院で亡くなって火葬場に送られる方たちは、どこのどなた様だかわからないのでございます。

それでもそこらの畑で鍬くわどりをしていた方たちが、「あらあ、どこの仏様じゃろうか。避病院に来て死んなはったばいな」と言い合って、一人で鍬をやっていた方も鍬を置いて死人さんに向かって合掌なさって、でも誰もお葬列に加わらない。畑のあちこちにいる見も知らぬ方たちからお見送りを受けてあの世に行かれました。そういう時代が続きました。

生きているときも、五十数年水俣病を抱えた一家がどのように苦しい思いをしてこられたことか。行政の長、長だけではありませんが、一分でも一秒でも考えてみたらわかると思うんですけれども。窓の外からご挨拶してもご自分を隠したい、そういう方のお苦しみ。一言もご自分の思いを語れない、箸も握れない。そういう方々のお心の中を思いやる情け、情け

があれば思いやってよさそうなものですけれども、思いやってもらえない。

人は何のために生きるのか。どういう関係であれ、人様との絆、心の絆をもてたときに、人間は生きていくという喜びがあるのではないのでしょうか。それなのに苦しいともうれいしいとも一言も言えない。何か尋ねたいことがあっても、こんなはずではなかったと思っても言葉をお互に交わすことができないということがどんなにお寂しいことか。

わたくしは文章を書いておりますから、そういう状況の水俣をいろいろ訴えてまいりましたけれども、受けとって下さって、見も知らぬ方々のお世話になってきました。長い間、よくお世話をして下さいました。この場をお借りして、ご縁のあった方々にも、ご縁のなかった方々にも、わたくしはお礼を、お礼を申し上げる資格はないのでございますけれども、高い所からではありませんが、お礼を申し上げます。本当に長い間お世話になっております。

でもまだ解決いたしておりません。今生きて苦しんでいる方たちの息が切れそうなときに、まなざしだけでいいのです。言葉でなくても、目で、そのまなざしで、私たちのことを思っていて下さると患者さんに思っていただければ。

もう、そのご恩返しはできませんので、それが水俣の、この問題を考え続けてきたわたく

しとしてはあまりに辛うございます。それで、ここに詩を書いてまいりました。題は、「まぼろしのえにし」でございます。わたくし自身も、たくさんの方々と縁えにしをもつて、おかげで人間の絆というものを、テーマとして考えさせていただいてきまして、拙い作品を書いてまいりました。お一人お一人、どのような行く末になられますことか。

みなさまのご幸福を祈らせていただきます。

お聞き苦しいかもしれません。読ませていただきます。

浜元二徳

私たちが一家を襲った恐ろしい公害病



私は中学校を出て上の学校には行きませんでした。進学すれば漁を手伝う人がおらんと両親が言うので、まだ艚が多かったころですが、動力船を造って三人で漁をしていました。私の記憶では昭和二七、八年（一九五二、三年）頃から海が汚れて魚が浮上したり、水俣湾に面した所のカキやアサリが口を開けてダラツとしとる。藻とかワカメは根こそぎ浮いてきとるような状態だったです。今の水俣湾しか知らん人は「本当かな」と思われるでしょうが、一〇センチぐらいの小魚がたくさん死んで浮いてましたし、五、六十センチの大きなスズキとかチヌが水面であつぷあつぷしてるのも見ました。もちろん獲ってきて食べたし、市場に出したり、近所にもあげました。

そういう状態の後、私の家では猫が三匹狂って死にました。よだれをたらしてヒョロヒョロとなったたり、すごく狂うて狂うて死んだんです。三匹死んでから後は、もう飼いませんでした。もちろん家の豚も鶏も死にました。

そのころはボラ釣り漁でしたから、餌づくりは大きい平釜に水を入れて、蚕の中にいるサ

ナギと糠ぬかを入れて炊いて大きいシヤモジで練ってダンゴにして、翌朝それを目籠めごに入れて天秤にかけて担になって、毎日汽車道通って(海に)行くんですが、その日に限って枕木につまずいてこけたんです。「あれ、おかしかね。いつも担になっていくのに。今日は量が多いわけじゃないかもね」と思っただけで行ったら、また海岸でつまずいてこけたんです。二回こけて、「ああ、こりゃおかしかね」と、このしびれとふるえに初めて気付いたわけです。そのとき私の後ろから、五つ年上の近所の中津さんが「二徳、どげんかありやせんな」と。「うん。今日は二回つつこくつとたい。なんでじゃろうかねえ」と答こえたら、「俺おるもたい」と言うわけです。「そんなら、病院行こう」ということになりました。

それを親父に言ったら怒られました。親父は体が大きかったし元気よかったです。私「なんかしびれて今日はもう二回もつつこけたもね」と言ったら、「お前どもは、幼児ヨシグレじゃつで」と。天草言葉で体の弱い者のことを言うんですけど、「幼児グレじゃつで、ぞげん変な病氣ばつかまゆつとたい。じゃが具合い悪ければ仕様しよんなか」と。

市川医院に行ったのが昭和三〇年(一九五五年)七月二〇日です。そこで、住所、氏名、職業とか書かされるわけですが、もうガタガタふるえて、書こうと思えば思うほど書けないわけです。緊張してふるえて、何と書いたかわからんほどで。診察してもらったら「うーん。

こりゃ疲れたい。きつからうが」と言われて、もちろんきついですから「はい」と答えたんです。「朝早よから晩遅くまであまり頑張るからたい。だからうまいもの食べてゴロゴロしとれば一〇日ばかりで良くなる」というので「先生、うまかもんって何食べればよからうか」と言ったら「とにかく好きなもん食べればよかったい」と言われたんです。それで、刺し身は好きだし、煮魚は好きだし、焼き魚も好きだし、獲ってくるからたくさん食べたわけです。ところが、一週間、二週間経つころにはしびれが手から腕の方にだんだん上がってくるよ、うで「こりゃつまらんねえ」と思って、別の医者に行つて、次に市立病院にも行つたけど、やはり同じで「疲れですよ。もう一週間もすりゃ良くなる」としか言われんから、今度は鹿兒島の方に行つて二軒かかったけど二軒とも同じ結果です。一軒めは切通きずしの灸いする所へ行つたんですけど、ここでも「疲労ですたい。三日ぐらいすればよか」と言われたんで、三日通かよつたけど良うならんし、家でおふくろに焼いてもらつても変わらなんだつた。それで出小いずみの医者にかかったら「これは疲れと思うけど大学病院に行つたかね」と言われたわけです。「いえ、行つてません」と言つたら、「大学病院に行つて治らなかつたらまたおいで」と言われ、「こりゃ頼たのもしかこと言わすねえ」と思つたけど、良うならん。

いろいろ回っているうち五軒にかかつて、また最初の市川医院に帰つたときにはもう二か